

遊び心のミュージアム「平野郷」 ～歴史文化のぬくもりを再生する「場」づくり～

大阪市の東南に位置する「平野郷」。夏のだんじり祭りや「環濠自治都市」を形成したことで有名である。伝統的な行事とともに、江戸期に完成した碁盤形の町割や町家も戦火を免れて残存しており、歴史が生活の中に息づいているような、味わいのあるまち並みが続いている。

あたたかみのある老舗も少なくない。ある時は、和菓子屋さんで自慢の餡子（あんこ）を味見させてもらっただけでなく「あんたも酒饅頭、作って見たらどうや」と珍しいオープンキッチンへ入れてもらった。またある時は、古い町家スタイルを残す伝統的な悉皆屋（しっかいや）さんで、「これ全部見るのに四日位かかりますよ」と、まちの歩みを長年撮り続けてきた写真やビデオの山を紹介された。主（あるじ）たちの地域への思い、その集大成とも言える仕事やこだわりの作品は、本当に楽しみながら創られたものばかりで、ただ感心させられるばかりだった。

この地域は、そんな住民たちによって積極的に町づくりが行われてきた。ノリがよく、無理をせず遊び心を大切にする。その発想のユニークさと自治・調整の技術は“平野人気質”からくるものかとも感じたが、まちや暮らしを考えるのにもっとも大切なものを教えられた気がした。

1. 平野郷の歴史～環濠自治都市、平野～

平野は、太古から開けており、縄文・弥生時代の遺跡も多く出土品が多数出ている地域である。地名は、平安時代の弘仁年間（八一〇年頃）征夷大將軍であった坂上田村麿（たむらまろ）の次男、広野麿（ひろのまろ）が領主となったため、その「広野」が訛って「平野」になったと伝えられている。この地を領有した坂上家は「平野殿」と呼ばれ、そこから分家していった一族で土地を分割して開発し、各々園地名田主として治めた。これが平野七名家（しちみょうけ）である。中世から近世にかけて、平野商人がめざましく活躍するが、中でも七名家の一つ末吉家は朱印船で海外貿易にも進出する大商人となった。こうして得られた富で、自治都市としてのまちづくりが進められていく。

戦国時代、交通の要衝として発展していた平野は幾度か戦禍に巻き込まれたが、自衛手段として、二重の堀、二重の土居で町を囲み、十三の惣門、遠見矢倉などを設け、「環濠自治都市」平野郷となった。信長・秀吉の直轄地となり大坂夏の陣でほとんど焼失したものの、江戸時代には復興し碁盤目の町割が完成、繰綿の産地として発展した。また文化的な活動も盛んで、杭全（くまた）神社での連歌会や夏祭りなどの伝統行事や「含翠堂（がんすいどう）」という学校の誕生など、社寺とともに、古い歴史と文化が今日まで生き続けている。

（コラム） 含翠堂（がんすいどう）

享保二（一七一七）年、平野郷内の同志が、学問所「含翠堂」を興した。学派を選ばず一流の学者（古義学の伊藤東涯、陽明学の三輪執斎など）を講師として迎え、生徒は入学卒業自由という校風であった。その経営は、平野商人を中心とした同志の寄金や謝礼により行われ、その積み

立てで飢饉の際に窮民を救済したことは、他の学塾にはみられない特色である。明治五（一八七二）年の学制公布まで百五十年余り存続した。

2. 平野の史跡・遺産

今、平野郷を歩くと、ところどころに歴史の面影が数多く残されている。

まず、古くて立派な家や蔵が多いのに驚かされる。江戸期以降戦禍を免れた平野には、江戸期、元和二（一六一六）年に完成した碁盤目状の町割が、今日までそのまま残されている。宝暦十三（一七六三）年の摂州平野大絵図の古地図に、環濠や惣門など「環濠都市」としての平野郷の形態が描かれているが、この地図を見ながら現在の道も歩いてしまうのである。環濠は明治期にほとんど埋められたが、わずかに残るその痕跡が昔の姿を物語る。杭全神社の周辺の環濠跡には石碑も建てられており、平野公園にも環濠と土居の名残がある。当時環濠の出入り口には木戸口が十三設けられていたが、そこにあった地藏堂のうち十二箇所が現存する。

町家も、江戸初期の豪商の家「末吉家」や、江戸時代後期に建てられた、農家的な性格の様式をもつ「今野家」をはじめ、むくり（椀状のふくらみ）をつけた棧瓦葺きの屋根や階高の低い二階、虫籠窓や立派な格子戸、長屋形式のものなど、各時代を語るような住宅形式の町家が数多く残され、趣のあるまち並みを形成している。

平野郷には社寺も多い。江戸時代から夏祭り（だんじり祭り）や連歌所などで親しまれている「杭全神社」、融通念仏宗の本山である「大念仏寺」、そして平野の真ん中にあるのが「全興寺」。飛鳥時代、平野が野原であった頃、聖徳太子によってここに薬師堂が建てられそこから平野が広がっていったという寺伝をもち、旧町名「野堂」の起源となっている（本尊は聖徳太子作の薬師如来）。また「長寶寺」では、閻魔さんの伝説があり毎年五月十八日、参拝者の額に閻魔大王の御判を押すというお祭りがある。歴史的建造物としてだけでなく、社寺から発信する文化や取り組みが、自然な形で昔から今日まで住民の生活に溶け込み、歳時記として継承されている。

（コラム）杭全神社とだんじり祭り

平安時代の初め、坂上広野麿が杭全荘を荘園として賜りこの地に居を構え、その子当道（とうどう）が、貞観（じょうがん）四（八六二）年に素盞鳴命（スサノオノミコト）他を祭神として神社を創建。明治三年に現社名となる。

杭全神社の夏祭りは宝永二（一七〇五）年に始まった。当時全国でも有数の産業都市であった平野の財力により実現されたもので、今日では、大阪市内最大のだんじり祭りとして有名である。毎年七月十一日から十四日の四日間開催。平野郷の九町自慢の地車が曳行され、勇壮かつ華麗なる舞が繰り広げられる。

大念仏寺

融通念仏宗の総本山で、大治（だいじ）二（一一二七）年、良忍上人が建立した。幾度が焼失し、現在のものは昭和十三年竣工、府下最大の木造建造物である。所蔵品である菅原道真直筆の「毛詩鄭箋残卷（もうしていせんざんかん）」は国宝に指定され、重要文化財「融通念仏縁起」

他がある。五月一日から五日、阿弥陀教万部会菩薩来迎練供養（あみだきょうまんぶえぼさつらいごうねりくよう）、いわゆる「平野のおねり」と呼ばれる豪華絢爛の練り供養が行われる。本堂裏から正面へ来迎橋がつくられ、その上を信者、稚児、僧たちが供養し、金の装束と面をつけた菩薩たちが本堂へ入るという有名な行事で、毎年にごわいを見せている。

3. 文化復興とまちづくりへの取り組み～「平野の町づくりを考える会」～

昭和五十五（一九八〇）年九月、南海平野線の廃止とともに、八角形の平野駅舎の保存再生運動が起こった。「平野のへそを残せ」というポスターも貼られ、それをきっかけに、平野のまちの歴史や文化を見直し、個性ある住みよいまちづくりをしようという気運が生まれた。「平野の町づくりを考える会」が結成されたのはその時である。

廃線跡地の利用について、地元と南海・大阪市との協議が続いた。有志が「駅舎のお葬式をしよう」と子供たちに呼びかけ、地域のお坊さんが駆けつけ、昭和五十七（一九八二）年三月七日に、地域住民による「駅・電車の告别式」が行われた。そして翌年五月、跡地は、平野線の面影を残す形で緑の遊歩道となった。

その後も、有志が有志を呼び、住民主体による「町づくりを考える会」の活動がさらに広がっていった。歴史的景観を守る「景観協約運動」としての署名活動（昭和五八年）や「町並みの総合調査」（昭和六十年）に加え、かつて行われていた歴史的文化的営みを今に甦らせようという伝統継承活動も活発になってきた。わが国最初の民間学問所「含翠堂」の顕彰碑が「平野戸主会」によりその跡地に建てられた年（昭和六十年）から年二回「含翠堂講座」が全興寺で開催される。また昭和六十二年から「平野連歌の再興」が実現した。元来文化的水準が高かった平野では、室町時代に連歌所が建てられ、連歌会が重要な行事として明治初年まで行われていた。現在杭全神社に残る連歌所は、宝永五（一七〇八）年に再建されたものだが、この貴重な遺産を大切に利用して毎月一回連歌会が開かれている。同じ杭全神社での「御田植え神事」も建久元年（一一九〇）年から伝わるが、平成四年には保存会が発足し、住民有志により奉納され、大阪府無形民俗文化財にも指定されている。さらに、平野名物であった平野酒・平野飴・平野蒟蒻の復興、平野郷のまちや文化を素材にしたコンサートや大小のお祭りなど、ユニークな企画が次々実現していった。そこには、「町づくりを考える会」による“まち並み調査”“まちめぐりツアー”や“まちめぐりガイド養成講座”などによって、わがまち再発見をする機会が増え、まちづくりを楽しもうと思う住民が育ってきたという背景もあるだろう。

<町ぐるみ博物館>

平成五（一九九三）年、まちそのものが博物館であるというコンセプトから、民間施設（ほとんどが個人の商店や住宅）を無料で開放して、いわゆる“お宝”や“コレクション”を披露する形で「町ぐるみ博物館」が始められた。七館でスタートし、現在では十五館に増えている。例えば、「駄菓子屋さん博物館」は、昭和二十年～三十年代に駄菓子屋に並んでいたおもちゃが展示されているが、これは全興寺住職の趣味のコレクションである。「自転車屋さん博物館」は、注文による変わり種自転車を製作する自転車屋さんに、改めて“博物館”の名前をつけたもの。「和菓子屋さん博物館」は和菓子の老舗である梅月堂の店頭で、

木型や焼き印など代々受け継がれた職人道具が並ぶ。その他にも、趣味で撮影した平野の写真や映像を紹介する「平野映像資料館」、館長が若い頃からコレクションされた浮世絵や陶磁器を展示した「浮世絵とやきもの博物館」など、たまたま所蔵していた珍品をお披露目する形がほとんど。開放日も、本業にさしつかえないよう、一か月に一日間のところが多い。「鎮守の森博物館」に至っては、杭全神社に残る大楠をはじめとする森をネーミングしただけの生きた博物館である。各館長が自分達のこだわり自慢を楽しんでいるのが継続のポイントであろう。一つ一つは小さくても、あちこちに残っている平野の歴史や文化を小さな「博物館」と言い切ってしまう、まち全体が大きな博物館であるという考え方が実践された平野郷は、地域ぐるみ博物館の先駆的存在になった。

お話 「町づくりを遊ぶ」

平野の町づくりを考える会事務局 全興寺住職 川口良仁 氏

自治都市の精神を受け継ぐ「町づくりを考える会」

「平野の町づくりを考える会」は、会則・会費・会長がなく、まさに遊び心によって、面白いことをいい加減にやってきた。そして結果を「評価しない」。行政やコンサルタントなどは、成功することにしかお金をかけないが、それより日常生活をいかに楽しむかを考えたいんですね。来場者が五百人のイベントと五十人のイベントでは、前者が成功で後者が失敗ではなく、それぞれ過程の方が大事なわけです。どこからも補助金をもらわないかわり、しんどくなったらやめる。固定目標や計画をもたないので、臨機応変に対処できます。お金がなかったのに、知恵と体を使ったことも逆にいい結果をもたらしました。自分たちでできる範囲で自分たちのまちをよくする、この活動には、平野がもっていた「自治都市」としての精神が生きているのかもしれない。

「町ぐるみ博物館」が有名になって、テレビで紹介されたりはじめて来た人に道をたずねられることが重なると、地元の間人は改めてわがまちに誇りを感じ、意識が変わってきたようです。「自分たちのまちのことをもっと知ってほしい」と思っはじめた活動ですが、外からの評価が入るとさらに住民内でまちを見直す気運が育ちますね。

広場としての遊び「場」づくりへ

住職として地域の中でのお寺のあり方についていつも考えているのは、観光寺院として歴史の切り売りをするのではなく、変わらぬ仏教の教えをいかに今に伝えるかです。嘘をついたら舌を抜かれるとか人を殺したら地獄へ行くとか、そういう概念を感じてもら一つの宗教的空間として全興寺には地獄堂を設けています。人々にとってのリラクゼーションの場としての瞑想室「ほとけのくに」もあります。あるいはまた交流の場としての役割も果たしたいという思いから、境内で街頭紙芝居をしています。大道芸はひとつのまちづくりの原点だと感じています。閉鎖的な多目的ホールをつくるのではなく、何も無いオープンな広場に人が集まってできる「場」づくりにこれからもっと取り組んでいきたいですね。

お話 お菓子をを通して平野を伝えたい 平野郷菓梅月堂 三代目 前田秀彦氏

「平野酒饅頭」は、平野酒（地酒）の酒かすを利用したお菓子ができないかと「町づくりを考える会」から提案をうけて創作いたしました。発売の平成七年から改良を加えて、もっとおいしくできないかと鉄の羽釜（餡を焦がさないためにかんりの技術を要する）で餡を炊き、今の味と形になりました。さらに、西店の方は、オープンキッチンにして実際作っている工程をお客様に見て頂けるよう改装いたしました。お店に入ったら小豆の香りがして、お客様も安心して話しかけてくださる。ふつう和菓子工場と販売店は離れていることが多いのですが、お客様とのコミュニケーションがとれ、今どんなお菓子が求められているのかがわかるので、職人にとっても作りがいがあります。月に1度、子供を対象に、酒饅頭づくりの体験会も催し好評をいただいています。

平野の歴史をイメージした手軽な焼菓子も創作しています。昔盛んであった綿作にちなんだ「わたのさと」、地獄堂と子供への思いをこめた「野堂おにそばろ」、明治期以降の西洋文化を取り入れたまち文化から「平野モダン」など、平野のことをお菓子を通じて伝えられるのは私だけだ！（笑）と、オリジナルのお菓子づくりに取り組んでいます。

お話 平野蒟蒻・平野弁・ガレッジセール・・・ 京政食堂店主 長尾幸男氏

昔平野は蒟蒻の名産地であり、ヒジキ・ギンナン・ゴマ等をまぜた具入り蒟蒻で有名だったので、「町づくりを考える会」で復活させようという話になって、最終的には私のところで手作りして、食堂メニューに加えることで継続しています。品質を重視し、買う人と顔をあわせたいと思って量産はせず、毎日売り切りの限定数しか作っていませんが、遠方からきてくださる方も多いです。

平野に関しては「平野弁」が面白いです。小さい頃から聞いて使っている言葉だけれど、だんだん消えてなくなってしまう。何かの形にして残しておきたいと思い「平野のオモロイコトバー〇」という冊子を作りました。印刷は、全興寺内にお経を刷る機械があるので協力してもらい安価でできました。また、「ガレッジセール」を杭全神社でやろうと言いだしたのは私で、「くすの木市」として年に三回開催していますが、平野の人はノリやすいから、これから商店街や家の前など、まちぐるみガレッジセールの日があっても面白いんじゃないかと考えているところです。

<平野郷H O P Eゾーン事業>

平成十一年、住民と行政、学識者が知恵を出し合って、平野の歴史的なまちなみを整備しようという「平野郷H O P Eゾーン協議会」が設立された。大阪市による地域の特色を生かしたまちの形成「H O P Eゾーン事業」の平野郷地域への取り組みの申し込みに対して、既に二十一年前からまちづくりを行っていた平野郷では、一度断ったものの、住民の思いを最優先に汲んで進めてくれるのであれば、と平野のまちづくりを前向きに進めていくことでこの事業をスタートさせた。

お話 祭りちょうちんが似合うまちなみへ

平野郷H O P Eゾーン協議会会長

松村長二郎氏

当初、大阪市が提案したまちづくりのガイドラインが、他のまちのものの焼き直しだったので、自分たちでつくろうと、アンケートやインタビュー、写真取材など、真剣にわがまちを研究し、一年がかりでガイドラインづくりを行いました。まちなみにあわせて建物の建築や改修を行う修景のモデルとして、まず和菓子店の老舗「亀の饅頭」改修に着手しました。その後も順調に増え、建売住宅も歴史的まちなみに配慮した住宅づくりを進めるようになった。平野らしさとは「祭りちょうちんが似合うまちなみ」と考え、特に夏祭りにはだんじりの通り道の全ての家の軒にちょうちんを灯そうと各家へちょうちんの有無を調査し、持っていない家には協議会から貸すことにして新調してもらったのです。当初行政の担当者は「四日間でもったいない」と考えていましたが、提灯は百年もちますから、イベントの時々で使ったら四百回以上使えることをやっと理解してもらって助成してもらいました。行政マンに柔軟に対応していただくために当初から骨を折りつつ、行政とけんかしながら仲良く対等な立場で進めています。やはり、平成の時代にやっていたことが百年後に自慢できるように、一つ一つ確実に実現させたいですね。

4. 歴史や文化、人とのふれあいの「場」

昨年にひき続き今年も「町ぐるみ博物館」の年に一度の特別展として、「平野・町ぐるみ博芸・博物館」が七月の第四日曜日に開催された。博芸演技者、博物館一日館長を募集し、得意ワザや眠っているお宝、他人に見せたいもの聞かせたいものを披露するイベントである。これまでも、「平野弁で歌う第九」(ベートーベンの第九を大念仏寺で大晦日に合唱するもの)や、まちを美術館に見立てて、アーティストと住民がつくった作品を展示した「モダンDE平野」など、まちかどを利用した平野らしい遊びが展開されてきたが、今年は特に、小中学校も積極的に参加した地域学習的な意味合いが強まった。

「好きでやっていること、味わいのあるものを、みんなに見てほしい、楽しんでほしい」。こういう純粋な気持ちから、素人の発想でその道のプロ達が手をつなぎあっている、それが平野である。月に一度の集い「ほろよいサロン」で「次、こんな面白いことしよう」と言い出した人を中心に準備が進む。まちのあちこちに、そんなイベントの手作りポスターが何種類も貼られている。

「町づくりを考える会事務局の川口さんは人の能力を見極めて適材適所でその力を生かせるように上手にしはるわ」「なんか川口さんが知らんうちにうまくまとめてはる」と各博物館の館長が口をそろえて言うように、このまちには信頼を集めるコーディネーターがいて、文化や技術面での達人が勢揃いして得意技を披露しあっている。その舞台としてふさわしいほど、平野郷には歴史的文化的な歩みがあり、町割、寺社、町家、濠跡など遺産が奇跡的にも現地保存維持されている。再発掘するにはあまりある素材がまちのあちこちに転がっている豊かさに住民自身が気付いたのであろう。

地元の教員や郷土史家などによって住民対象に行われた「平野郷めぐり」というガイドツアーにたまたま参加した時、平野蒟蒻や酒饅頭が試食として惜しみなく提供された。別の日の取材時にもまたごちそうになり、特に梅月堂さんなどは、お土産として店頭の商品を何種類もくださり、さらに「町ぐるみ博芸・博物館」の開催日には、千人近い来客に水饅頭と麦茶をふるまっていた。“けっして大規模な店ではないのに大丈夫だろうか”とおそ

るおそる「あのお…、見学やお祭りの度にこんなことされていたら、大変ですね。」「おいしいものできたから食べてみてほしい、よく来てくださいました、という気持ちですから。できる範囲のことしかしないから大丈夫」とにっこり切り返された。

平野は、夏のだんじり祭りという伝統的な行事を通して育成された地域コミュニティを多少なりともベースにしながら、「もっと面白いこと、あたたかい気持ちになれること」を求めて、住民である自分のため、子供たちのためのまちづくりに成功している。「観光は光を観ると書くが、目で見えるような形あるまちづくりでなく、見えないものつまり音やにおい、人とのふれあい、文化などを肌で感じる“感風”の心を大事にしたい。実はそういう目に見えないものこそまちを構成しており、簡単にはつukれない」と川口氏は語る。そんな平野が「わがまち」であるこの地域の人々がうらやましく思えた。

今、核家族化も進み、情報技術の進歩によりインターネットや携帯メールで、顔をあわせずコミュニケーションをとる時代。地域の高齢者と子供たちがふれあう機会も激減しているなか、そこへ行けば何かおもしろい体験ができるような、ほっとするような広場、世代を超えて交流ができるような空間づくりがますます大切になるだろう。歴史や文化のぬくもりを生かしたふれあいの「場」が、いかに人を元気に幸せにするものか、何よりも「平野の町づくりを考える会」の方々のきらきらと輝く瞳が、もの語っていた。

<参考文献>

- 『おもろいで平野』 和泉書院 平野の町づくりを考える会
『平野郷町誌』 平野郷公益会 一九三一年
「大阪春秋」 44号 一九八五年
『大阪まち物語』 創元社 なにわ物語研究会
『歴史の散歩道』 清文堂 大阪市土木技術協会
「歴史の散歩道」 大阪平野郷コース 企画発行 後藤仁郎
「大阪人」 二〇〇一年八月号
「SEMBA」 一九九三年七月号 ほか

*取材にあたり、地方史研究会の村田隆志氏にも大変お世話になり、感謝いたします。